

4 課

10月22日

旧約聖書の希望



安息日午後 10月15日

暗唱聖句

信仰によって、アブラハムは、試練を受けたとき、イサクを献げました。つまり、約束を受けていた者が、独り子を献げようとしたのです。……アブラハムは、神が人を死者の中から生き返らせることもおできになると信じたのです。それで彼は、イサクを返してもらいましたが、それは死者の中から返してもらったも同然です。(ヘブライ 11:17、19、新共同訳)

信仰によって、アブラハムは、試練を受けたとき、イサクをささげた。すなわち、約束を受けていた彼が、そのひとり子をささげたのである。……彼は、神が死人の中から人をよみがえらせる力がある、と信じていたのである。だから彼は、いわば、イサクを生きかえして渡されたわけである。(ヘブル 11:17、19、口語訳)

今週の聖句

ヨブ記 19:25～27、1テモテ 6:16、詩編 49 編、詩編 71 編、イザヤ 26:14、19、ダニエル 12 章

今週のテーマ

旧約聖書の希望は、ギリシアの靈魂不滅の思想ではなく、終わりの時の死者の復活という聖書の教えを根拠としています。

しかし、火葬によって灰になったり、あるいはその他の方法で埋葬されたりした、もはや存在しない人間の体が、どのようにして再び命あるものに戻るのでしょうか。数百年、数千年も前に亡くなった人が、どのようにして再び自己を回復させるのでしょうか。

これらの問いは、生命の神秘についての思索へと私たちを導きます。私たちは生きて、神が日々恵みによってお与えになる生命を享受します。たとい超自然的な生命の起源を理解できなくとも、私たちは、初めに神が、御言葉の力によって生命のない存在に命をもたらしたことを知っています(創1章、詩編33:6、9)。ですから、もし神が、最初に地上に無から(ラテン語で「エクス・ニヒロ」)生命を創造することがおできになったのなら、私たちは、人間を再創造し、そのあるべき姿に回復させる神の力をどうして疑えるのでしょうか。

今週私たちは、旧約聖書の時代に、最終的な復活の思想がどのように解き明かされたかを、特にヨブと詩編記者の言葉、そしてイザヤとダニエルの預言に焦点を当てて考えます。

問1 ヨブ19:25~27を読んでヨハネ1:18、1テモテ6:16と比較してください。いつ、どんな状況で彼は「神を仰ぎ見る」ことを望んだのでしょうか。

人生は公平ではありません。とりわけ、「善人」が苦しみ、「不義な者」が栄える（詩編73:12~17、マラ3:14~18）のを見るときにそう感じます。例えば、ヨブは「無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて」（ヨブ1:1）生きていました。それなのに、神はサタンがいくつもの方法でヨブを苦しめることをお許しになりました。肉体的には、彼の体は痛ましい皮膚病（同2:1~8）によって悲惨な状態になり、物質的には、多くの家畜と財産を失います（同1:13~17）。彼の一家からは、僕を失い、子どもたちさえも失います（同1:16、18）。そして感情的には、友人たちからは、彼に臨んだ惨事にふさわしい頑迷な罪人として責められます（同4:1~5:27、8:1~22、11:1~20）。彼の妻でさえ次のように言います。「どこまでも無垢でいるのですか。神を呪って、死ぬ方がましでしょう」（同2:9）。

ヨブは、彼が神とサタンの間の根深い宇宙的争闘の中心にいることを知りませんでした。それらの闘いに苦しめられながら、ヨブは自らの誕生を悔やみ、生まれてこなければ良かったのにと自らの誕生をのろいます（ヨブ3:1~26）。それでもなお、彼の神への無条件の忠誠は次の言葉の中によく表されています。「見よ、彼はわたしを殺すであろう。……しかしなおわたしはわたしの道を彼の前に守り抜こう」（同13:15、口語訳）。ヨブは、自分の命がまもなく終わることを予測しながら、死んで終わりではないという確信を持ち続けていました。ヨブは強い確信を持って、自分は死んでも、いつの日か贖い主は立ち上がってくださり、自らは肉体を伴って神を仰ぎ見るだろうと述べています（同19:25~27）。「これは紛れもなく復活を垣間見ることです」（『SDA聖書注解』第3巻549ページ、英文）。

これほどの悲劇のただ中であって、なんとという輝かしい希望でしょう。病と痛みで覆われ、経済的に破綻し、社会的に非難され、感情的に打ちのめされてなお、ヨブは、死からよみがえり、贖い主を仰ぎ見るその日を待ち望んでいたのです。事実、ヨブの復活についての言葉は、何世紀も後にマルタがイエスに言った言葉と同じ確信に満ちています。「終わりの日の復活の時に復活することは存じております」（ヨハ11:24）。ヨブはマルタのように、信仰によってこの約束を確かなものにしなければなりませんでしたが、ヨブと違ってマルタは、すぐに死者の復活を目の当たりにすることになったのです。

問2 詩編49編を読んでください。希望なしに滅ぶ者たちとは対照的に(同49:6~14〔口語訳49:5~13〕)、なぜ、詩編記者は、これほど確かで最終的な復活の希望を得ることができたのでしょうか(詩編49:16〔口語訳49:15〕)。

詩編49編は、「財宝を頼みとし、富の力を誇(り)」(同49:7〔口語訳49:6〕)、「自分の名を付けた地所を持っていても」(同49:12〔口語訳49:11〕)、「死ぬときは、何ひとつ携えて行くことができ……ない」(同49:18〔口語訳49:17〕)愚かな者の誤った自信について語っています。彼らは、彼らの家と栄光が永遠に続くかのように行動します(同49:12、18〔口語訳49:11、17〕)。

しかし愚かな者は、彼らの名誉は消え、獣たちがそうであるように彼らも滅びることを忘れています(同49:13〔口語訳49:12〕)。「陰府に置かれた羊の群れ／死が彼らを飼う。……誇り高かったその姿を陰府がむしばむ」(同49:15〔口語訳49:14〕)と言います。

ヨブが、「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ」(ヨブ1:21、1テモ6:7)と言ったように、数世紀後に、詩編記者も、愚かな者も知恵ある者も共に死に、「財宝を他人に遺さねばならない」と指摘します(詩編49:11〔口語訳49:10〕)。

両者の間には根本的な違いがあります。一方の愚かな者は、永遠には続かない富や功績に安心感を得ようとしながら、滅びます。対照的に知恵ある者は、人間の武勇伝や陰府という牢獄を越えたところにある神が用意してくださった輝かしい報いに目を留めます(1ペト1:4)。この違いのゆえに、詩編記者は確信を持って「しかし、神はわたしの魂を贖い／陰府の手から取り上げてくださる」(詩編49:16〔口語訳49:15〕)と言うことができたのです。

旧約聖書の希望と一致してこの聖句は、死んだときに魂がすぐに天国に飛んで行くことを示唆していません。詩編記者は、人は永遠に墓に留まることはないと言っているだけです。神は、人を死から贖い、天の宮廷に連れて行ってくださる時が来るというのです。

未来の復活の確かさが、希望と平安、そしてこの世に生きる意味をもたらします。ですから、知恵ある者は、この世で愚かな者が自分で集める物よりも、はるかに輝かしい永遠の報いを受けとることができるのです。

どうすれば自分の富と功績を頼みとする愚かさ気づき、同じ過ちに陥ることからあなたを守る十字架を見つめ続けることができるでしょうか。

問3 詩編71編を読んでください。「地の深い淵から」(詩編71:20) 引き上げてくださると神に願うという表現は、何を暗示しているのでしょうか。

詩編49編で私たちは、富を頼りとする愚かな者の誤った安心感とは異なる、感動的な復活の希望の表現について学びました。詩編記者は、詩編71編で、神は彼を見捨てられたと言う敵と偽りの告発者に囲まれてもなお、神からの保証と希望を求めます(詩編71:10、11)。

試練のただ中であって、詩編記者は、神が過去にどのように彼を守られたかを思い起こし、慰めと保証を見いだします。まず彼は、神が誕生の時から彼を支え、母の胎から取り上げてくださったことを悟ります(詩編71:6)。次に神は、若い時から彼を教^とえてくださったことを知ります(同71:17)。

神が自分の岩、砦であるとの確信を持って詩編記者は嘆願します。「わたしのためにのがれの岩となり、わたしを救う堅固な城となってください」(詩篇71:3、口語訳)。「老いの日にも見放さず／わたしに力が尽きても捨て去らないでください」(同71:9)。「神よ、わたしを遠く離れないでください。わたしの神よ、今すぐわたしをお助けください」(同71:12)。詩編記者は付け加えます。「あなたは多くの災いと苦しみをわたしに思い知らせられましたが／再び命を得させてくださるでしょう。地の深い淵から再び引き上げてくださるでしょう」(同71:20)。

「地の深い淵から」という表現は、文字通り、詩編記者が将来、肉体を持って復活することを暗示していると理解することができます。しかし文脈からすれば、まるで地が彼をのみ込んだかのように深く落ち込んでいる詩編記者の状態を比喩的に表現していると思われる(詩編88:7〔口語訳88:6〕、同130:1と比較)。ですから、「それは本来比喩的な表現であるが、肉体の復活の暗示である」(『アンドリュース・スタディー・バイブル』詩編71:20引照)と言えるでしょう。

重要なことは、私たちの状況がどうであれ、神は^そこにおられ、心に留めてくださり、最終的に私たちの希望は、この世ではなく^{きた}来るべき世界、すなわち、イエスがおいでになりわたしが復活した後、イエスにあって与えられる永遠の命に見いだされるということです。

私たちは皆、ひどく落胆することがあります。しかし、過去に主が共にいてくださったことに目を注ぐことは、主が遠く感じられるときにも主を信じ、信頼して前進するためにどのように助けとなるのでしょうか。

問4 イザヤ 26：14、19 を読んでください。永遠に滅びる者たち（イザ 26：14、マラ 3：19〔口語訳 4：1〕 参照）と永遠の命を受ける者たち（イザ 26：19）との違いは何でしょうか。

イザヤ書は、神の威厳と人間のかなさを大きく対比しています（イザ40章）。私たちは枯れる草、しぼむ花のような者ですが、神の御言葉は永遠に残ります（イザ40：6～8）。しかしながら、私たち人間の罪深さにもかかわらず、神の救いの恵みは全人類に与えられ、神の契約を受け入れて安息日を守る異邦人にも有効となります（イザ56章）。

イザヤ書には、復活の希望が重要な意味を持って開示されています。これ以前の聖書の復活についての説明は、より個人的な視点で描かれていましたが（ヨブ19：25～27、詩編49：16〔口語訳49：15〕、詩編71：20）、預言者イザヤはそれを、自分自身と契約を信じる者が集まる共同体の両者を含むものとして語っています（イザ26：19）。

イザヤ26章は悪しき者と正しい者の明確な運命を対比しています。一方で、悪しき者たちは、少なくとも「第二の死」（黙21：8）の後、再び生き返ることなく、死んだままになります。彼らは完全に滅ぼされ、彼らの記憶はすべて永遠に消え去ります（イザ26：14）。この聖句は、死後に生きて残る魂も霊もないことを強調しています。この後の悪しき者の最終的な滅びについて、主は、別の箇所、悪しき者は完全に焼き尽くされ、「根も枝も残さない」（マラ3：19〔口語訳4：1〕）とされています。

他方で、正しい者の死者は、祝福された報いを受けるために死からよみがえります。イザヤ25章は、主なる神は「死を永久に滅ぼしてくださる」、そして「すべての顔から涙をぬぐい……去ってくださる」（イザ25：8）ことを強調しています。イザヤ26章に、次の言葉があります。「あなたの死者が命を得／わたしのしかばねが立ち上がりますように。塵の中に住まう者よ、目を覚ませ、喜び歌え。あなたの送られる露は光の露。あなたは死霊の地にそれを降らせられます」（同26：19）。すべてのよみがえった正しい者は、主がすべての民のために用意される祝宴に参加します（同25：6）。最後の復活の時には、あらゆる時代のすべての正しい者たちが集められ、その人々の中に、キリストにあって亡くなったあなたの愛する人たちも含まれるのです。

新約聖書は死者の復活について多くを語っていますが、すでに学んできたように旧約聖書においても死者の復活の思想を見ることができます。旧約時代の人々は、私たちと同じように最終的な復活の希望を持っていました。イエスの時代に生きたマルタも、すでにこの希望を持っていました（ヨハ11：24）。当時、ユダヤ人のすべての人が信じていなかったとしても、終わりの日の復活について何らかの知識を持っていたことは間違いありません（使徒23：8参照）。

問5 ダニエル 12 章の大いなる預言にはどんな復活の希望が含まれていますか。

ダニエル 12：1（口語訳）は、「大いなる君」ミカエルについて言及していますが、それが誰を表すのかについては多くの論争を生んできました。しかし、ダニエル書の一つひとつの大いなる幻は、キリストとその王国の現れで、頂点に達します。同様のことがこの聖句にも当てはまるでしょう。ダニエル書には、「天の万軍の長」（同8：11）、「君の君たる者」（同8：25、口語訳）、「メシヤなるひとりの君」（同9：25、口語訳）、そして最後に「大いなる君ミカエル」（同12：1、口語訳）として、同じ神聖な存在について言及しています。ですから、ミカエルもまた、キリストを表しているとも考えるべきです。

これまで学んだ旧約聖書の聖句（ヨブ19：25～27、詩編49：16〔口語訳49：15〕、詩編71：20、イザ26：19）は、すべて義人の復活について語っています。しかしダニエル書12章は、義人と悪人の両方の復活について述べています。ミカエルが立つとき、「多くの者が地の塵の中の眠りから目覚める。ある者は永遠の生命に入り／ある者は永久に続く恥と憎悪的となる」（ダニ12：2）のです。

この聖句は、キリストが戻られるときに起こる特定の人々の（義人だけでなく、悪人もいる）特別な復活について述べていると、多くの人々が見なしています。

「墓が開かれる。『地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者は目をさますでしょう。そのうち永遠の生命にいたる者もあり、また恥と、限りなき恥辱をうける者もあるでしょう』（ダニエル12：2）。第三天使の使命を信じて死んだ者はみな、栄化されて墓から現れ、神がご自分の律法を守った者たちと結ばれる平和の契約を聞くのである。『彼を刺しとおした者たち』（黙示録1：7）、キリストの死の苦しみをあざ笑った者たち、そして、キリストの真理とその民とに対して最も激しく反対した者たちは、栄光をまとわれたキリストをながめるために、また、忠実で従順な者たちに与えられる誉れを見るために、よみがえらせられる」（『希望への光』1910ページ、『各時代の大争闘』下巻415ページ）。

参考資料として、『国と指導者』第60章「栄光にみちた国が来る」を読んでください。

現代の科学者たちは、すべての物質は原子から成っており、原子は二つの小さな分子、クォークとレプトンという粒子からできており、それらはすべての物理的実体を形成する基礎単位であると信じられています。もしそうであるなら、物理的世界の中心にあるのはクォークとレプトンであり、この世界を創造し、維持しておられる神は、私たちが復活するときには、ただクォークとレプトンを再構築すればいいのではないのでしょうか。無神論者のバートランド・ラッセルは、復活をあざけて、人食い人種が食べた人はどうなるのか、食べられた者の体はもはや食べた者の体の一部なのだから、復活の時に両者が自分の体を取り合うことになるのかと、問いました。主が、単に存在の究極の基礎単位であるクォークとレプトンをどこからか手に入れられて、私たち1人ひとりについて主が持つておられる情報に基づいて私たちを再構築されるとしたらどうでしょうか。主は私たちのオリジナルの体を必要とされません。どんなものでも良いのです。主は、御言葉によって新しいクォークとレプトンを生じさせ、お造りになることができるのです。宇宙を創造された神は、死者の復活に際しても同じようにして再創造してくださることを約束しておられるのです。

「生命の与え主は、第一の復活の時に、彼が買い取った者たちを呼び出されるだろう。そして、最後のラッパが鳴り、神の大軍勢が永遠の勝利に入るその凱旋の時まで、神にその名を覚えられているすべての眠れる聖徒たちの安全は保たれ、貴い宝石のように守られるであろう。生きている間、彼らのうちに宿っていた救い主の力によって、そして彼らが天の性質を受け継ぐ者であったがゆえに、彼らは死から引き上げられるのである」(『SDA聖書注解』第4巻1143ページ、英文)。

話し合いのための質問

- ① ヘブライ 11章は、「信仰の勇者たち」と呼ばれる古代の多くの信仰者の忠実さと彼らの抱いていた希望に光を当てています。この章は、旧約聖書の登場人物たちがイエスの復活の前でさえ持っていた希望について、私たちの理解をどのように助けるでしょうか。

生ける水を分ち合う

ペルーからやって来た鉱山業代表団の1人、アントニオ・マルドナドは、ワシントンのホワイトハウスのレセプションで、ゲストに高級なウイスキーが配られているのを見ました。しかしアントニオは、リンドン・B・ジョンソン大統領と乾杯するために1杯の新鮮な水が欲しいと、ウェイターに丁寧に頼んだのです。

それは難しいリクエストに思われました。会場にいたすべての人がウイスキーのグラスを持っているようでしたし、アメリカとの取引をまとめようとしているときに、仲間の代表者たちに恥をかかせることもできなかったからです。しかし彼は、アルコールがペルーの家庭に荒廃をもたらすのを若い頃に見て、決して飲酒はしないと誓っていました。また、2年前の1963年に、預言の声のラジオ放送を聞いて、イエス様に心をささげておりました。

アントニオがウェイターと話をしている間、ある人が彼を見ていました。その目は、ウェイターが水の入ったグラスを持って来て、アントニオに手渡すのを見ていたのです。そのあと、ウェイターは別の男性に呼び止められ、「ちょっと待って。あの紳士は何をあなたに頼んだのかな」と尋ねられました。

「あのお客様は、ウイスキーの代わりに新鮮な水が欲しいとおっしゃられたのです。大統領」とウェイターが答えると、大統領は腕を伸ばしてウイスキーのグラスをウェイターに渡し、「私にも1杯の水をくれるかな」と言いました。

乾杯のあと、大統領はアントニオに近づいて、ささやきました。「なぜ、他の人のようにお酒を飲まないのですか」。するとアントニオは、満面の笑顔で答えました。「私が若かった頃、決して飲酒はしないと誓ったのです。そして何年か経って、神様とその誓いを新たにしましたのです。今までのところ、すべてが順調です！」

大統領は手を差し出し、「おめでとう。あなたは立派な模範を示しておられる。私も信仰の人です。神様の祝福があなたにありますように」と言うと、力強い握手



をして会話は終わりました。アントニオは、レセプションに戻ったとき、好奇の目を感じました。信仰によって強められた彼の断酒の習慣が、地球上で最も力のある人の1人と予期せぬ出会いを生んだのです。彼の心は、ホワイトハウスで神様を証してきたことで喜びにあふれました。

今日でもアントニオは、妻のエンマと住むペルーのコンセプションで毎日神様を証したいと願っています。(デイヴィッド・マルドナド)